

悪源太

ワキ 石山寺の住僧

シテ 悪源太義平

ツレ 難波次郎

地は 近江

季は 雑

ワキ詞

「是は江州石山寺の住僧にて候。さても源氏の大將
悪源太義平。落人となり給ひ。当寺を頼み御落
ち候ふ間。当寺の衆徒共頼まれ申し。本堂の西の
妻戸に置き申して候。又都へ注進申す事の候ふ間。
岩の坊へ移し申し。酒をすゝめ申さばやと存じ候。
いかに案内申し候。悪源太殿の御座候ふか。寺中
より御使に参じて候。

シテ

「何の御為にて候ふぞ。

ワキ

「さん候本堂は人目しげき所にて候。岩の坊と申し
て要害よき所にて候。あれへ御移り候へ。

シテ

「さても義平落人となり落ち下る所に。当寺の人々
かひぐしく頼まれ給ふ事。誠に頼もうこそ候
へ。殊に岩の坊へのこゝろざし切に存じ候。さら
ば岩の坊へ立ち越えうずるにて候。

シテ詞

「左馬の頭殿の行方や知しめし候。

ワキ詞

「さん候左馬の頭は尾張の国長田の庄司を頼み御落

ち候ふところに。長田の庄司かひぐしく頼まれ
申し。日番きびしく守護し申し候ふところ承りて
候へ。

シテ「長田は譜代の郎等なれば。よも心がはりは候ふま
じ。さて頼朝は何とかなりて候ふらん。

ワキ「それは何方の御志とは知らず。当国へ御下り候ひ
て草野の辺に御座候ひしを。平家の侍弥平兵衛
三百余騎にて都へ御供申したると承り及びて候。

シテ「さては早切られてぞ候ふらん。末の露本の雫や世
の中の。今日ありとてもあだ命。明日をもいさや
白真弓。石山寺の苔とや朽ちん。定めなの世の中
や。

ワキ詞「しばらく候。源氏の当寺より御出であつて。出世
し給ひし嘉例の候。

シテ「それこそ聞かまほしう候へ。とくく御物語り候
へ。

「さても康保元年八月十五日に。紫式部当寺に籠り源氏の物語を書く。されども大慈大悲の御ちかひにや。程なく源氏六十帖を書き大やけに奉る。君此草子を叡覧あつて。諸国に弘め給ひしよりこのかた。源氏の物語とて天下に名を得たる草子なり。また此君も源氏の嫡子にてましませば。当寺より御出であつて。必ず御代をめさるべき。御瑞相とこそ存じ候へ。

「それは物語の源氏。是は武勇の手本。たとへにならぬ事なれども。名詮自称と申す事の候ふ程に。時の祝言候ふな。

「中々の事必ず御代をめされうずるにて候。

「実にや縁もなつかしき。紫式部が筆の跡。

「出でし源氏も此寺の。大慈大悲の値遇の縁。

「薩埵の悲願さまぐなれども。多き中にも救世の願。

ワキ 「有縁は殊に申すに及ばず。

シテ 「縁なき人をも洩らさじの。

ワキ 「ちかひぞ深き。

シテ 「鳩の海。

地 「さゝ浪さゆる志賀の浦。 く。 洲崎に立てる一つ松

の。 影すぐく見えたるは。 今の義平が。 たぐひな
き身に知られたり。 比良の山。 おろしや寒き比叡
の大嶽。 雪のふゞきのさえかへり。 志賀の山越園

城寺。 関山栗津見え渡る。 瀬田の長橋。 とだえ
なく多き名所かな。

ワキ 詞 「いかに申すべき事の候。 悪源太殿の十六騎の兵。

御大将共に十七騎の御名字が承りたく候。

シテ 詞 「安き間の事語つて聞かせ申すべし。 昔は源平左右
にして。 朝家を守護し奉るといへども。 保元の代
の乱れ。 親子兄弟おし分つて。 敵となり味方とな
る。 こゝに悪右衛門の督信頼といふいたづら者に与

し。平治に謀叛を起し、かば。源平両家の合戦となる。

地「去んぬる保元に。く。味方と有りし清盛も。

平治の今は敵となつて。合戦数度に及びたり。平家は三千余騎。味方はわづか五百余騎。されども軍には。一度不覚の名を取らず。

クセ「平家の大将重盛が。手勢五百余騎。信頼が固めたる。郁芳門にさし向ふ。陽明門は纔に。義平が

手勢十六騎。たとへば蝟螂が斧を執つて。龍車に向ふ如くなり。十六騎の兵は。鎌田兵衛政清。後藤兵衛実元。波多の次郎義通。佐々木の源三三浦の次郎。山の内の。須藤刑部成道。岡部の六弥太忠澄。長井の斎藤別当実盛。猪の俣の小平六のりつな。熊谷の次郎直実。金子の十郎。平山の武者季重。足立の右馬の允。上総の介広綱。関の次郎伊切の八郎。是等は一人当千の兵。悪源太我十七

騎是なり。

ワキ詞

「近頃承る事にて候。とても御事に候はゞ。二条

堀川材木の合戦の有様。まなうで御見せ候へ。

シテ

「さても義平は陽明門を固めたりしに。達智門にお
はします。義朝の方より使者を立て。悪源太一合
戦仕れとありしかば。畏つて候ふとて。例の十七
騎。敵五百余騎が中に割つて入り。散々に切つて
まはる。敵五百余騎は味方十七騎に切り立てられ。

大庭の棕の木のもとまで追つ散らさる。其時鎌田
申すやう。重盛の召されたる御鎧は。唐革と申し
て。射るとも切るとも裏かく事あるまじ。唯御
馬をあそばし候へ。跳ね落さんとする処を寄つて
組ませ我君と申す。実にもと思ひ十三束の中ざし
よつぴいて放つ。何かは少しはづすべき。馬の三つ
よりむながひ掛けずつゝと射通す。名馬なれども
こらへずして。頻りに跳ぬれば重盛は。二条堀川

材木の上におり立つて。小烏ぬいて待つ処を。

地「政清是を見て。馬より飛び下り太刀さしかざし。たちばなの政清と。名乗りかけく。重盛に切つてぞかゝりける。

シテ「重盛が郎等に。

地「重盛が郎等に。与三左衛門かげやすも。馬より飛び下り太刀抜いて。重盛がおもてに立つて。鎌田兵衛と戦ひけるが。いざや組まんと太刀投げ捨

てゝ。所は二条堀川の。筏の上にてむずと組んで。上や下へところび居たり。さる程に義平は。重盛を討たんとかゝりしに。政清組み負けて下にあり。義平心に思ふやう。重盛を討つならば。其隙に鎌田討たるべし。重盛は後にても逢ふべし。鎌田を討たせてかなふまじと。上なる与三左衛門が。甲を取つてかなぐり捨て。乱髪をいかんて首かき落す。其隙に乗替に乗つて重盛は。跡も遙に逃

げのびたり。あら惜しの敵や。

シテ
「思へば悔しや。

地
「手ごめたる敵を打ちもらし。遂に軍に打ち負けて。

落人の身となる。運の極めぞ悲しき。

ロンギ地
「よし何事も定め無き。習ひを頼みおはしまし。御

代を待たせ給へや。

シテ
「かやうに聞けば慰みの。心催す盃の。情有りとよ
人々。

地
「はや時うつる日の影の。かたぶく酒の盃の。

シテ
「数重なれば程もなく。

地
「無明の眠りすゝみ来て。

シテ
「酔ひの心も。

地
「其まゝに。前後忘れて義平は。猛き心も弱りて。
礼盤を枕に臥し給へば。衆徒は静かにさし足して。
座敷を立ち去りぬ。御運の程ぞ痛はしき。

難波詞
「抑是は難波の次郎経遠にて候。さても源氏の大將

悪源太義平。江州石山寺を頼み御落ち候ふ処に。始めは衆徒頼まれ申し。又心がはりし都へ注進申し候ふ間。経遠に討手の大将衆給はり。手勢七十騎を以て。只今石山寺に下り候。いかに此内に悪源太殿の御座候ふか。都より御迎に参じて候。

シテ「義平是にありそも何者ぞ。

難波「難波の次郎経遠が御迎に参じて候。

シテ「さては義平を生捕るとや。

難波「中々の事。

シテ「あらずとよ汝は二条堀川の合戦に。正しき主の重盛を捨てゝ。行方も知らず逃げし奴が。討手とははかぐしや。

難波「正なくも御淀候ふものかな。かくるも引くも軍の習ひ。時に従ふ事ぞかし。よしともあれや若き者共。参りて生捕り奉れと。経遠が下知に従つて。

地「究竟の兵七十余騎。く。切先を揃へて持仏堂の。

小庭のおもてに乱れ入る。

シテ「義平が手並をば。

地「保元平治両度の合戦に。兼ねても見もし聞きつらん。汝等に向つては。打物よごしと思へども。時の敵は力なしとて。礼盤を手楯に取つて。二尺五寸の小太刀を抜いて。小椽に躍り出でゝ。向ふ敵を待ち懸けたり。心は猛くましませど。多勢に一人は叶ふべきか。追つ取り廻して攻め申せとて。

大勢一度にばつとかゝれば。

シテ「義平是にありとて。

地「多勢が中に割つて入り。弓手に合ひつけ馬手にあひつけ。蝶鳥稻妻石の火の。見あへぬ程に切り給へば。嵐に木の葉の散る如く。大勢は乱れ散つて。門よりあらはに切り出だす。

シテ「義平心に思ふやう。

地「義平心に思ふやう。打ち破つて落ちん事は。やす

き間の事なれども。心と生捕られて都に上らば。
重盛に對面せんずらん。さもあらば縄引き切つて。
重盛が首ねぢ切つて。思ふ本望遂ぐべきものと。
小庭の面に立つて。太刀も投げ捨て楯も捨て、
縄かけよ生捕れと。いへども恐れて寄る者なし。

難波

「其時経遠下知をなし。

地
「其時経遠下知をなし。討ち申す事なかれ。生捕
り奉れ。寄れや者共と下知すれば。兵一度にばつ

とより。手取り足取り千筋の縄を。くりかけ奉り。
難波が馬にかき乗せ申し。都へ上れば囚人と申せ
ど。御顔気色はあたりを払つて。恐ろしかりける
勢かな。